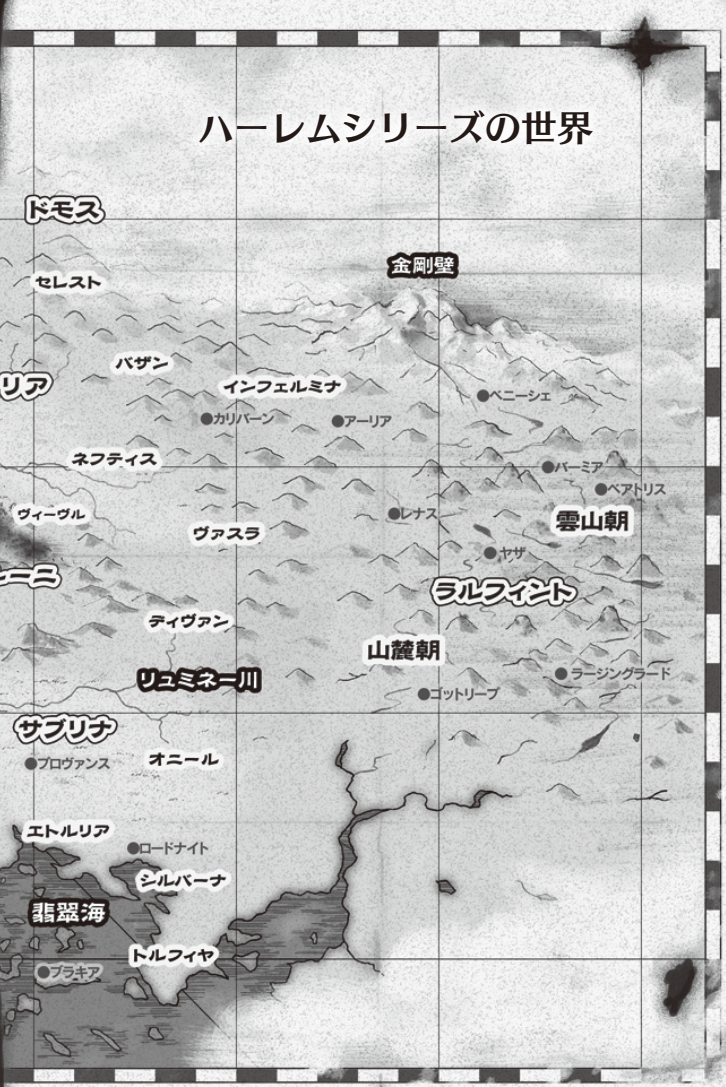
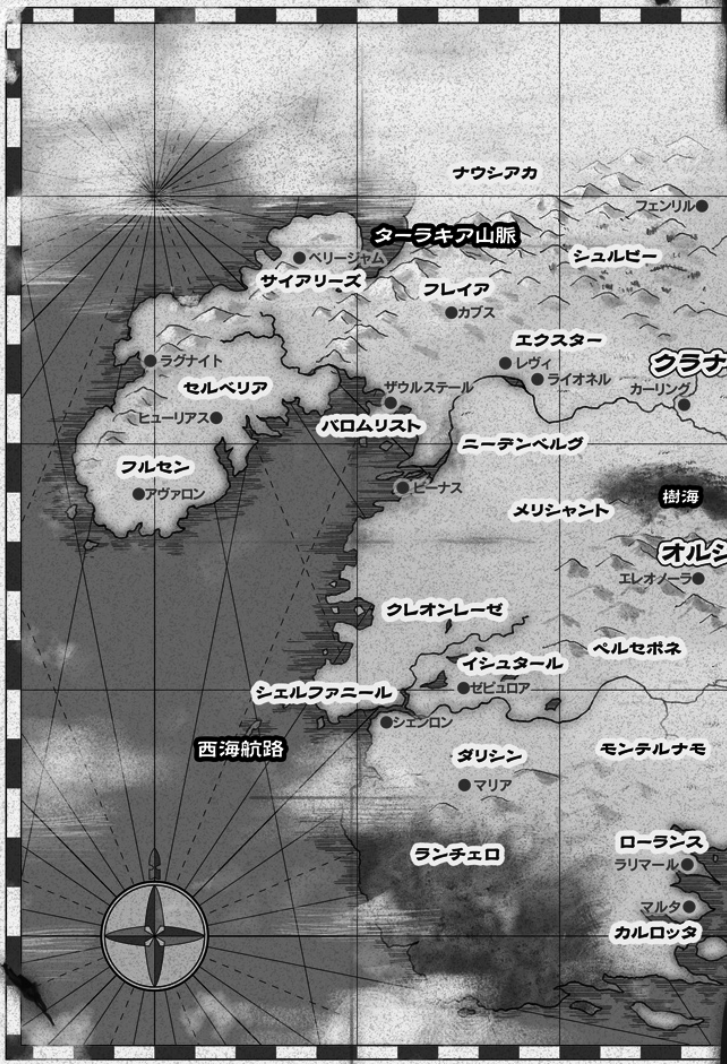
立ち読み版
小説 竹内けん
挿絵 かん奈
ハーレムレジスタンス2
Harem Resistance

ハーレムシリーズの世界




ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
ベリージャム
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エクスター
ラグナイト
レヴィ
ライオネル
クラナ
セルベリア
ザウルステール
カーリング
ヒューリアス
バロムリスト
ニーテンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
オルシ
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼピュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

登場人物紹介

Characters

ブライザ

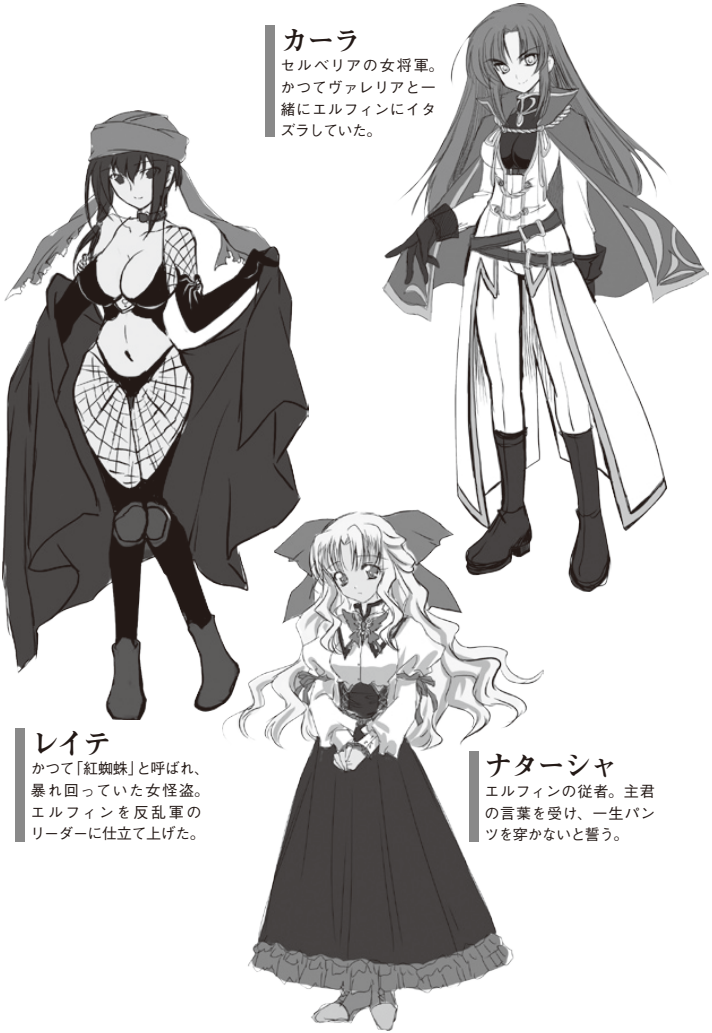
サイアリーズ王国の一揆の指導者イルベルトの妹。「薔薇の剣姫」の異名を持つ女騎士。

ヴァレリア

セルベリア王国の貴族であり、戦では無敵を誇る女将軍だったが、エルフィンに敗れ捕虜となる。

エルフィン

暴君が治めるセルベリア王国に反旗を翻し、祖国フルセンの領主となった少年王。



カーラ

セルベリアの女将軍。かつてヴァレリアと一緒にエルフィンにイタズラしていた。

レイテ

かつて「紅蜘蛛」と呼ばれ、暴れ回っていた女怪盗。エルフィンを反乱軍のリーダーに仕立て上げた。

ナターシャ

エルフィンの従者。主君の言葉を受け、一生パンツを穿かないと誓う。

第一章　薔薇の剣姫　009
第二章　薔薇の棘　048
第三章　薔薇の花弁　085
第四章　薔薇の罠　125
第五章　薔薇、散る　159
第六章　狂い咲く薔薇　210

気高い魂とは裏腹に、肉体的には牝として、すっかりマゾ的な性感が発達してしまっているヴァレリアは、白い尻にピンクの紅葉を鮮やかに浮き上がらせながら喘ぎ、大人しくなった。

屈辱と性感にプルプルと震えたヴァレリアは、涙目になりながらも睨みつけてくる。

「貴様は、わたしをどこまで愚弄するつもりだ」

「約束でしょ。セルベリア王国を滅ぼす手伝いはしない。その代わり、好きなだけ犯していいと言ったのはヴァレリア様ですよ」

生尻をくねらす被虐の美女の耳元でエルフィンはねっとり宣言する。

「今のヴァレリア様はぼくのものですよ。身のほどを弁えてください」

「ぐっ」

悔しげに唇を噛みながらも、覚悟を決めたヴァレリアは中腰になり尻を突き出した。

セックスに関してはかなり従順になった元上司の痴態に満足しながら、エルフィンは観客に顔を向ける。

「どうだい。貴女が仇と狙う大天使殿も、もうこの通りぼくの牝犬だ。少しは気が晴れたんじゃないかな」

「はい」

ブライザは恥じ入るでもなく、じっと同性の哀れな後ろ姿を見つめた。

少しは動揺することを期待していたエルフィンは、当てが外れて戸惑いながらも、当初

に思いついた趣向通りに声をかける。
「貴女がどうしても、彼女に復讐したいのなら、このお尻を叩くといい」
「よろしいので？」
「ああ、おもいっきり叩くといい」
エルフィンの言葉に試されている、と感じたのだろうか。きつい表情をしたブライザは進み出た。
「それでは遠慮なく」
腰に佩(は)いていた剣の柄に手をかけたかと思うと、目にも見えない速さで抜剣。
バチン！
「ひぃっ……」
ヴァレリアの尻が横にも割れたかと思うほどの一撃だった。白い尻臀に赤い線が走ったが、割れてはいない。どうやら刃のない平部分で打たれたようだ。
「……」
驚くエルフィンの前で、無言のブライザは悠然と剣を鞘にしまう。
「ああ、ああ……」
驚愕と痛みからだろう。ヴァレリアは両目と口を大きく開き、硬直しながら震えている。やがて少しずつ全身の硬直が解けてきたかと思うと、痛みで尻が痺れたのだろう。
ダラダラダラと股間から熱い液体が噴き出した。

「……あ、いや、ダメ、止まらない」
失禁を止められず慌てているヴァレリアの醜態を見ながら、あまりにも予想外の顛末にエルフィンは絶句した。
この戯れを思いついたエルフィンとしては、いきなりヴァレリアの濡れた股間を見せられたブライザは恥じて逃げ出すか、そうでなくても震えながら手で軽く叩く程度だと予想していたのだ。
それがまさか顔色一つ変えずに、ここまで容赦のない一撃が加えられるとは思いもしなかった。思わず気を呑まれながら口を開く。
「貴女は容赦のない性格だな」
「閣下ほどではありません。御用がこれだけでしたら失礼します」
慇懃無礼なほどに丁寧に一礼したブライザは、すたすたと部屋から出ていってしまった。
それを見送った後エルフィンは、下半身を熱い滴で濡らしている姉とも慕う愛人に声をかけた。
「ぼく、彼女に軽蔑されちゃったかな？」
ようやく失禁は止まったが、下半身をだだ濡れにさせたヴァレリアは、顔を火照らせながらも、軽蔑した眼差しを返す。
「それはしただろ。誇りある女なら、いくら仇とはいえ、このような扱いを受けているのを見て気分がいいはずがない」

その観測を、エルフィンは全面的に認めて頷く。
「まぁ、ぼくを軽蔑することで、ヴァレリア様に対して少しでも同情する気持ちを持ってくれるといいんですけどね」
「なに取りつくろっている。完全にしてやられたくせに」
ヴァレリアの決めつけに、エルフィンは返す言葉もない。こうなったら男としての面子を保つ方法は一つだ。
「それはそうとヴァレリア様？」
「なんだ？」
「今の一撃、凄い興奮したでしょ。何せおしっこを漏らしちゃったくらいですからね」
項をさらに赤くしたヴァレリアは、恥辱にプルプル震える。
自分を仇と狙う女の前で尻と陰唇を晒して、一撃を食らって失禁だ。大天使とまで称えられ、万余の兵を指揮した身としては恥辱で死にそうなのだろう。
（誇り高い人だからな）
その気高さがエルフィンをして、夢中にさせている要因だ。
いくら辱めても、決して堕天しない大天使に、エルフィンは心底惚れている。
「そろそろ我慢できないんじゃありませんか」
「おまえ、計算違いをエッチでごまかそうなどと、器が小さいぞ！」
ヴァレリアの指摘に、エルフィンは嘯（うそぶ）く。

「器なんて大きく見せる演技をすればいいんですよ」
「ああ言えばこう言う。ほんと可愛げのないガキだ……」
「あぁあ、こんなに赤く腫れちゃって。痣になったら大変だ」
吐き捨てるヴァレリアの言動は無視して白い尻を撫でたエルフィンは、屈み込み、剣の平で打たれた尻の跡を舌で舐める。
「あぁん、この変態がっ！」
罵りながらもヴァレリアの声はすっかり甘く蕩けている。
いくら心は気高い大天使でも、肉体は人間のものに過ぎないのだ。すっかり被虐の歓びに目覚めているヴァレリアに気をよくしたエルフィンは、同時に指先を雫に濡れる肉唇に向けた。
「欲しいって言わないと、この汚いオマ〇コ、永遠に弄り倒しますよ」
「やりたいなら、したいだけすればいい。わたしは抵抗しないと言っただろう」
「ヴァレリア様からぼくのおちんちんが欲しいって叫ばないとダメです」
クチュクチュクチュクチュ……。
エルフィンの指先が媚肉を弄び、あたりに卑猥な水音を響き渡らせる。肉壺はまるで指を貪るように吸いついてきた。
「まったく……」
まるで我儘な弟に屈したお姉さんといった感じで諦めたように溜息をついたヴァレリア

は、大声で艶声を張り上げた。
「ああ、ああん……ちょうだい……。エルフィンのおちんぽ、わたしのおま〇こにちょうだい」
「そう、それでいいんです。ヴァレリア様はぼくのものですからね」
最愛の女性の潔い態度に満足したエルフィンは、ズボンの中から逸物を取り出した。
すでにダンスの時からギンギンの逸物である。
それをヌレヌレのヴァレリアの陰唇に突き立てた。
「はぁん……」
じゅぷぅぅ……。
恥辱の汁に濡れた陰唇は、憎き男の逸物をなんなく呑み込んでいく。
捕虜となったヴァレリアの身体を、エルフィンはこうやって幾度となく陵辱していた。
処女を奪ったのはもちろん、フェラチオだってさせたし、アナルだって犯している。彼女の身体の中で、エルフィンの視線と指先と舌先と逸物と精液が触れていない部分は一つとして残ってはいない。
「あはっ、やっぱり、ヴァレリア様のオマ〇コは最高だ」
興奮したエルフィンは、両手を腋の下から入れて、青いセクシードレスの胸元をはだけさせる。
ボロリと巨大な乳房が夜霧の中に露出した。

「うふふ、ビンビンだ」
ピンクの宝石のような乳首が二つ、ぴんっと突起していた。
それを包み込むようにして鷲掴みにしたエルフィンは、ヴァレリアの乳房を揉みしだきながら、腰を叩き込む。
「あっ、ああっ、ああ……」
「いい声です。ヴァレリア様はぼくの女。そのことをセルベリアの連中にも、サイアリーズの連中にも知らしめてやってください。さぁ！」
パン、パン、パンパンパンパン！
女の尻と、男の腰が当たって拍手音が上がる。
肉棒はズコズコと出入りして、女の最深部までをえぐり尽くす。
「ヴァレリア様、貴女はなんですか？」
「え、エルフィンの女ぁぁ」
「そう、その通りです。ぼくのものです。ぼくだけのものです。くぅ♪」
普段は冷静なエルフィンなのだが、ヴァレリアと身体を合わせると興奮のあまり、ただの少年になってしまうことが多い。
「ああ、もう、もう……」
独占欲を刺激され無茶苦茶に突き上げてくるエルフィンの勢いに追い詰められたヴァレリアが白目を剥いて喘ぐ。

身体中でエルフィンの精液がかかっていない部分はない、と言っていいほどに。
それなのにさらに激しい奉仕をしなくてはならない、ということでブライザも困ったようだ。
「考えて。貴女がエッチなことをしてくれると、ぼくはとっても嬉しいんだ」
三つほど年下の主君に煽てられたブライザは、眉根を寄せて必死に考えてからなんとか思いついたらしい。
「こ、今夜はわたくしが上になって腰を振ります。陛下に楽しんでもらえるよう腰をいっぱい振ります。はぁ、一晩中、腰を振り続けます」
「それは楽しみだ。貴女の腰使いは激しいからな」
莞爾（かんじ）と笑ったエルフィンは、ショーツの足穴の狭間から指を入れ、柔らかな陰毛を掻き分けて進むと、その奥にある膣穴に指を入れた。
「そ、そんな……ことは……はぅ、陛下、このような場所で……ああ」
今さら貞操云々を言う関係ではないとはいえ、今は真っ昼間。それも王宮の渡り廊下である。いつ他人が通ってもおかしくない場所だ。
ブライザは不安げにあたりに視線を泳がせる。しかし、エルフィンのほうは委細構わず肉壺を穿（うが）った。
「ぼくは貴女の茨の園のようにザラザラなオマ〇コが大好きでね。この中に入るとすぐにイかされてしまう」

「あ、ありがとうございます。気に入ってもらえて嬉しいです♪」
悶えるブライザの膣洞の腹側のごく浅いところを、エルフィンの指先は探る。
「貴女の異名、薔薇姫とはこのオマ〇コの形状から来ているんじゃないかな？」
「そ、そのようなことは……」
ブライザの処女は、エルフィンによって散らされたのだ。よってブライザの膣内の構造を知っているのは、エルフィンだけである。それとわかっていながら、辱めているのだ。
エルフィンは指の速度を上げた。
クチャクチャクチャクチャ……。
いかに気位の高い女でも、男に陰唇を悪戯されたら濡れてきてしまう。淫らな水音が立ち、それがますます女の被虐感を高める。
「へ、陛下、はぁ……、はぁ……、はぁ……」
羞恥に悶えるブライザの肉体が十分に高まったところで、エルフィンは指を引き抜き、こってりと愛液の滴る指を舐めた。
「薔薇水の味だ♪」
実際に薔薇水の味がするのではなく、気分の問題だ。
顔を真っ赤にして俯くブライザに、エルフィンは訴えた。
「ブライザ、今夜はたっぷりと腰を振ってもらうとして、ぼくは今我慢できなくなっちゃったんだけど」

「こ、このような場所で……」
王宮の渡り廊下。今はたまたま誰もいないが、いつ人がきてもおかしくはない。
目の前には美しい庭園が広がり、大きな噴水があり、その周りに色とりどりのチューリップが咲き誇っている。
このような場所で犯されるなど恥辱の極み。しかし、同時に被虐の歓びも感じるのだろう。ブライザの瞳が妖しく輝く。
「うふふ、主君の命令には逆らえません。どうぞ陛下のお好きなように……」
「それじゃ、庭園の花々にも負けぬ、麗しくも淫らな薔薇のご開帳といこうか」
エルフィンは、ブライザの左足をぐいっと持ち上げて肩に担ぐ。
若草色のミニスカートがめくれ上がり、男に見せることを十分に意識したであろう。絹のお洒落なショーツがあらわになる。
そのまたぐり部分はすでに失禁したかのようにヌレヌレだ。
脱がすのももどかしいと思ったエルフィンは、股布を左によけると、いきり立つ逸物を取り出し、叩き込んだ。
「はぅん♪」
薔薇と例えられるほどに気位の高い女であっても、連日の夜伽で男に慣れてきてしまっている。
ヌレヌレザラザラの肉襞が、肉棒に絡みついてきた。

「ブライザのオマ〇コはほんとザラザラで凄い。とっても気持ちいいよ。ぼくはブライザに完全に溺れちゃったね。こういうのを運命の女と出会うというのかな？」
「ああ、そう言っていただけると、嬉しいですぅ♪　わたくしは陛下の女ですから♪」
朝の燦々たる陽射しの中、王宮の渡り廊下で、年若い王とその愛人は、人目もはばからず、愛欲を貪る。
ズコ！　ズコ！　ズコ！
エルフィンが激しく逸物を出し入れさせると、溢れ出した愛液が、ブライザの軸足の太腿を濡らす。
薔薇に例えられるほどの気位の高い美貌を誇る女が、恍惚とした表情で口元をだらしなく開いて、涎を垂らし、白目を剥く。
「ひぃ、ああ、いい。陛下のちんぽいい♪」
それは誰が見ても、すっかり男に溺れた女以外の何者でもなかった。
これがあのサイアリーズ一揆の象徴と言われた「薔薇の剣姫」だとは誰も思うまい。
「ブライザ、も、もう、イくよ」
「はぁ、はぁ、あ……わたくしはいつでも、いつでも、イけます。陛下のちんぽさえいただけたら、も、もう……ああ♪」
すっかり男に慣れてしまった女体は、射精の瞬間を今や遅しと待っている。
茨のようにザラザラした肉襞が、そして全身がブルブル震えていた。

「それじゃ、いくぞぉぉぉぉ」
エルフィンは一気にラストスパートをかける。激しく子宮口を突きまくり、己が欲望のままに片足を上げた女の最深部に向かって吐き出す。
ドクン、ドクン、ドクン！
「あぁぁぁぁぁぁ!!!」
ビクビクビクビクビク……。
ブライザの全身は激しく痙攣した。膣内射精されると反射的に絶頂するようにその身が成長してしまっているようである。
しかも、それだけではなかった。
プシュッと男女の結合部から液体が噴き出した。
どうやら、絶頂と同時に潮を噴いてしまったらしい。
（女の身体ってのは、セックスすればするほどに敏感になって、エッチな身体に成長するんだよなぁ）
一仕事終えたエルフィンが満足していると、背後から冷や水を浴びせられた。
「まったく、朝っぱらから何をやっているのだ」
その冷たく底冷えした声から、顔など見なくとも誰かわかる。
背筋を震わせたエルフィンが、恐る恐る振り向くと、そこには予想通り竜胆色の鎧を纏った大天使ヴァレリアが怖い顔をして立っていた。

いや、表情はいつもと変わらない。冷たく怜悧な美貌だ。
「こ、これは……」
どもりながらも、エルフィンが言い訳しようとするよりも早く、理性を取り戻したブライザは、小さくなった逸物を胎内に咥えたまま、見せつけるようにエルフィンと接吻した。
「無粋なことを……うむむ」
唾液をたっぷりと交換した後に、男と女の唇の間に唾液の橋を作りながらブライザは、ヴァレリアの顔を見た。
「嫉妬かしら？　陛下のお情けを賜ることは、女にとって至高の歓びですからね」
「……」
氷の眼差しと、棘の眼差しが正対して、火花を散らす。
期せずして、二人が初対面の時と真逆の形となったわけだ。
もっとも、あの時のブライザはエルフィンに興味などなかっただろうし、ヴァレリアもエルフィンの麾下に入ることを拒否していた。
しかしながら、月日は流れて、二人ともエルフィンの寵愛を得る女となった。
かつてセルベリア王国の柱石であった女と、サイアリーズ一揆の柱石であった女。どちらも無理めの女の極致にいるような女たちだ。
普通の男が言い寄ろうものなら、無言で叩き斬った後に、何事もなく去っていくのではないか、と思えるほどに気位高く凄味のある女たちである。

そんな怖い女たちの修羅場である。側にいるだけで気死してしまいかねない殺気があたりに漂う。
エルフィンとしても、どう仲裁していいものか、判断に迷っていると、ヴァレリアの口角が吊り上がった。
「ふん」
鼻で笑ったヴァレリアは、肩を怒らせて背を向ける。
「評議の時間だ。みな待っているぞ」
エルフィンは評議に出席をしようと部屋を出たところだったのだ。
国王不在では御前会議を始められない。なかなか現れないエルフィンを、ヴァレリアは捜しにきてくれたのだろう。
要件は済んだとばかりにヴァレリアはそのまますたすたと歩いていく。その後を慌ててエルフィンもついていこうとすると、ブライザが止めた。
「あ、少々お待ちを」
主君の前に跪いたブライザは、精液と愛液でベトベトになっている逸物を口に含んだ。
「う、うむ、うむ」
丁寧に舐め清めてくれている。
刺々しいほどにきつい美貌でそのようなことをされると、否応なく男の自尊心がくすぐられる。

三人の同性から全身を撫で回されたブライザは、たまらず身悶え抵抗する。
「ん？　何をする、やめろ。わたくしにはそっちの趣味はない」
「趣味はなくとも教えてあげるわよ」
嘯いたレイテは、ブライザが逸物から口を離したのをいいことに、身体を反転させた。
「くっくっくっ、相変わらず絶壁女ね」
戦士として極限まで鍛えられているブライザには贅肉は少なく、結果として乳房もかなりあっさり目である。
同性として、ヴァレリア、ナターシャ、レイテの瞳に優越感が浮かぶ。さすがのブライザも羞恥心から胸元を隠す。
「乳房は大きければいいというものではない。陛下はわたくしの乳房も可愛いと言って愛してくださる」
完全に恋に盲目状態になっている女に呆れたレイテは、ついで局部を見下ろし、さらに驚きの声を出す。
「なに、あんたまだ剃毛しているの？」
以前、エルフィンへの忠誠心を試すためにした剃毛劇からすでにかなりの時間が経っているというのに、ブライザの恥丘は一本の陰毛もない禿げ丘だったのである。
それに対してさすがのブライザも恥ずかしげに言い訳した。
「その……伸ばそうとしたら、ご主人様が痛がってしまって」

一度剃毛した後、中途半端に伸びた陰毛というのは、剣山のように尖っている。そこに挿入して腰を振るうと、男の股間に刺さるわけで、滅茶苦茶痛い。
「はぁ～、つまり生え揃うまで我慢できずに、自ら剃る道を選んだわけか……」
呆れるヴァレリアの前で、ブライザは涙目になりながら応じる。
「だって、ご主人様に入れてもらえないと、わたくし、寂しくて死んでしまう」
「……あ、その気持ちはわかります」
ブライザの血を吐くような告白に、ナターシャは全面的に同意する。
「同じエルフィン様を好きな女として、わたしブライザさんのこと、決して嫌いではありません。でも、そのためにエルフィン様のお邪魔をすることは許せません」
嫉妬と使命感に燃えたナターシャは、ブライザの手をよけると再び乳首を口に含む。
「はぅ……、やめ」
「男がかかわると周りが見えなくなる女がたまにいるが、おまえがまさにそれだな」
ヴァレリアもまた、ブライザのもう一方の乳房を口に含む。
「はぁ……ああ……」
「うふふ、女の嫉妬は怖いのよ。それじゃあたしはここ」
最後にレイテは、ブライザの禿げ丘に口づけすると、クンニを始めた。
ピチャピチャピチャ……。
「はぁ、くっ、やめろ。わたくしは……、くっ、ご主人様以外に、ああ、この身を許すつ

もり……あああ！」
女の身体は女が一番よく知っている、という例え通り、ナターシャ、ヴァレリア、レイテの愛撫は的確だった。いかに強靭な意志を持つブライザでも、同性三人に玩具にされて、悶絶してしまう。
「ああ、いや、そんな、わたくし、わたくしは……ひぃ、ご主人様ぁぁ」
涎を噴きながら、エルフィンの顔を見上げたブライザは右手を上げて懇願してくる。
同性にイかされるよりも、愛する男にイかされたい、という意思表示であろう。その手を握り返してやりながらエルフィンは、三人の側室に声をかける。
「その程度で許してあげてよ。ぼくが全員満足させてあげるから」
その言動を受けて女たちは、ブライザの局部から口を離した。
「その言葉に二言はないわね」
ヴァレリアが眼光鋭く確認してくる。その瞳を真正面から受け止めてエルフィンは頷く。
「ええ、もちろんです」
「仕方ないわね。好きにしろ」
ヴァレリアがやめたのを機に、レイテ、ナターシャもブライザから離れる。
「ご主人様♪」
同性たちの意地悪な責めから解放されたブライザは、心底から嬉しそうな媚びる笑みを浮かべる。

その頭を撫でてやりながら、エルフィンは命じる。
「それじゃ、入れてあげるから、お尻をこっちに向けて」
「はい。我がご主人様」
ブライザは嬉々として、背中を向けて、両肘で上体を支えながら、下半身では膝立ちになって尻を高く突き出す。
その引き締まった尻を両手で持って、唾液に濡れ輝く逸物を添える。
「最初はブライザでいいよね」
「まぁ、そこまで出来上がっちゃっていればね」
レイテの言葉に、ヴァレリアとナターシャも頷いた。そこでエルフィンは腰を進める。
ズブリ！
「はぁん♪」
多くの同性に見られる中、背後から貫かれたブライザは、まるで狼が遠吠えでもするかのように背筋を反らして、気持ちよさそうな喘ぎ声を上げた。
だけではない。自ら腰をクネクネクネと動かし始めた。
「うお」
膣圧というのも、詰まるところは筋肉であるから、ブライザの膣圧が優れているのは自明のこと。その上薔薇の棘のようにザラザラとした強烈な抵抗である。
これで扱かれたエルフィンは、思わずうめき声を漏らし、ブライザの尻から手を離し、

彼女の両手首をそれぞれ持って馬の手綱を引くように操った。
「ああ、いい、いいです。ご主人様のぶっといちんぽ、ちんぽ、ちんぽ」
両手を男に取られながら、膝立ちになったブライザは胸を張り、涎を噴き、自ら腰をくねらせる。
身体能力に優れたブライザは、激しく腰をくねらせながらも、決して逸物が抜け落ちるようなヘマはしない。
ジュブジュブジュブ！
溢れ出る愛液が、細い太腿を失禁したように濡らしている。
「あん、あん、あん、あん、花が、花が散っちゃう！」
あたりはばからず嬌態を晒すブライザに、痴態を見せつけられた女たちが呆れる。
「うわ、自分からこんなに腰振る女、初めて見た」
「男に媚びまくりの腰使いね」
「……いやらしいです」
レイテ、ヴァレリア、ナターシャは軽蔑しながらも、頬を染め、羨ましそうな表情を浮かべる。
「ああ、いい、いい、いいのぉ♪　ご主人様のおちんちん、気持ちいいのぉ♪」
激しい腰運動でブライザの全身からはぬめるような汗が吹き出し、肌がつやつやと淫らに輝く。

まったく周りの見えていないブライザの姿に、ヴァレリアが溜息をつく。
「つまり、エルフィンを騙すための痴女の演技は、演技じゃなくて素だったってことか？」
それをレイテが受ける。
「男って口ではなんだかんだ言いながら、淫乱な女好きだからね。坊やが最近、彼女とばかり褥を共にしていた理由がわかったわ」
「なるほど、これをやられると、男も夢中になるのか」
ヴァレリアとレイテの会話の横で、ナターシャは何やら決意を新たにしている。
「そっか、わたしも、頑張らないと……」
何やら独り、腰の振り方を練習しだしたナターシャを見て、レイテとヴァレリアは同時に肩を竦めた。
「いずれにせよ、棘の抜けちゃった薔薇なんて、もう薔薇とは言えないわよね」
「ああ、こういうのを単なる痴女と言うのだ」
レイテとヴァレリアは、両腕を後ろに回した後背位で、自ら腰を振りまくって乱れているブライザの上体をさらに上げさせた。
「な、何をするつもりだ……、わたくしはご主人様だけのもの」
上体を上げられたブライザは、得意の腰使いを中断させた。
レズっ気はまるでないどころか嫌悪感すらありそうなブライザは、意地悪な同性たちの視線に若干怯む。

「次が支えているわ。とっととイキなさい」
「そういうこと♪」
ヴァレリアとレイテは、淫汁に濡れたブライザの耳元から首筋、胸元へと舌を這わせる。乳首を吸い、脇腹を舐め、さらに下りる。
「うわぁ、つるっぱげのオマ〇コに、ぶっといおちんちんが出入りしている姿って、なんか生々しいわね」
「ああ、確かに予想以上に卑猥だな」
頷きあったレイテとヴァレリアは、その禿げ丘に接吻。棘のように跳び出す淫核を左右から舐めた。
「ああ、らめ、やめて、やめて、やめて、ひぃ、ひぃ、ひぃ」
ビクビクビク……。
同性に嫌悪感しかない女でも、男根をぶち込まれた状態で淫核を二人かがりで舐められたらたまらないのだろう。
白目を剥いた惚けた表情で、口角から涎を垂らす。
しかし、ヴァレリア、レイテの狙いはそれだけではなかった。二人の舌は、肉棒の穿つ蜜壺の狭間に入り舐め回し、それから肉棒を下り、肉袋を舐めてきた。
「ちょ、ちょっと……!?」
ブライザだけではなく、自らの身に危険を感じたエルフィンは震えたが、もはや時すで

に遅し。
二人の熱き舌は、肉袋の中の睾丸をペロペロと舐め、そして、それぞれの口内に含んでしまった。
「うっ」
男にとっての最大の急所が、嫉妬に狂う女たちの危険な口内に包まれたのだ。本能的な恐怖に駆られたエルフィンは身震いした。
（しかし、ここはじっと耐えるしかない）
エルフィンは肉棒をふかぶかとブライザの体内に押し込みながら、腰は使わずにひたすらに嵐が通り過ぎるのを待った。
レイテとヴァレリアはまるで睾丸を飴のようにペロペロと舐めている。
そんな時である。エルフィンの背中にフワリとした柔らかいものが押しつけられた。そして、右の耳元に熱い吐息がかけられる。
「ナ、ナターシャ!?」
「わたくしも、エルフィン様に楽しんでもらうために、腰を振れる女になります♪」
痴情に狂った少女は、愛しい男の背後から抱きついてきたのだ。尻のあたりにサラサラと当たるのはナターシャの陰毛だろう。
前面をぴたりと密着したナターシャは、その状態で身体を上下させる。
「あん、エルフィン様の背中でおっぱい擦れて気持ちいいですぅ♪」

「あ、ちょっ、ちょっと……ああ」
ブライザの、よく締まる上に、茨のようにブツブツな膣洞に逸物を入れているだけで、普通に考えれば男が満足するには十分な刺激だ。
その状態で射精寸前の睾丸を二人の美女の口内に含まれて舐められる。
極めつきに背後から、一見、清純そうな美少女の身体を押しつけられて、温もりを擦りつけられたのだ。
「あ……ああ……」
エルフィンは世にも情けない声を漏らして、震えた。
「うふふ、睾丸がピクピクしているぞ」
「そう簡単に射精していいの？　女はまだまだいるのよ」
ヴァレリアとレイテが嗜虐的に男を追い詰める。その口腔で甘噛みされている睾丸から溢れ出した熱い血潮が、肉棒を駆け上がっていく。
「ああ、ビクビク、ビクビク……す、凄いぃ……♪」
「くっ、ダメだ。止まらない！　あああ!!!」
断末魔のうめき声とともに、逸物は激しく脈打った。
ドクン！　ドクンッ！　ドクンッ！
「ひぃ～！　きた、きた、きた、きた。ああ、イクゥゥゥゥゥゥゥゥッ!!!」
子宮に愛しい男の熱い精液を注ぎ込まれる。牝が体感できる至福の瞬間。膝立ちで股を

開いた姿勢のままアへ顔を晒したブライザが、下腹部を激しく脈打たせたと思ったら、ブシャッと熱湯を噴き出した。
「うわ、この女、あたしたちが下にいることを承知で漏らしやがった」
「まったく、絵に描いたような痴女ね」
レイテとヴァレリアは、不快さに顔をしかめながらも、女壺に口を突っ込むと小さくなっていく逸物を掘り出した。どうやら、このまま再戦を強要されるらしい。
「エルフィン様♪　エルフィン様♪」
ナターシャは周りの状況など委細構わず、自らの乳房と股間を男の背中に擦りつけるのに忙しい。
（まったくみんな好きだな。まぁ、仕方ない、みんなぼくの女なんだし、全員満足させないと。それにしても、国王ってほんと大変なんだなぁ）
使命感に燃えたエルフィンは、夜を徹して乱交に励んだ。

※

「お～い、エルフィン。今日は久しぶりにサイアリーズ方面の重臣どもも参加する定例会の日でしょうが。みんな集まっているわよ。いつまで待たせるつもりよ」
親衛隊長のロージーを押しのけて、寝室にズカズカと入ってきたカーラは、寝台の上を見て呆れる。
中央に座ったエルフィンの右側にレイテ。左側にナターシャが侍っている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

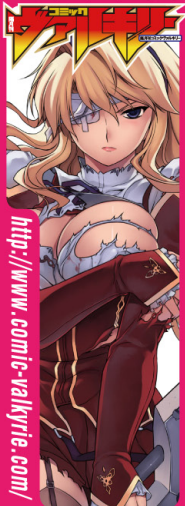
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！